平成２７年度学校司書資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究

学校図書館を活用した授業実践

**国語科学習指導案**

平成27年10月20日（火）7時間目15：05～15：55

東京学芸大学附属国際中等教育学校総合メディアセンター

4年2組29名

工藤裕子（国語科、司書教諭）　渡邊有理子（学校図書館司書）

**授業の概要**

**単元名**　「本」という存在

**使用教材**　石川直樹『歩き続けるための読書』・角田光代『旅する本』（第一学習社　新訂国語総合）

　　　　　齋藤孝『読書力』（岩波新書）、永江朗『不良のための読書術』（ちくま文庫）

　　　　　平野啓一郎『本の読み方　スロー・リーディングの実践』（ＰＨＰ新書）

　　　　　内田樹『内田樹の研究室』（ブログ）、その他新聞記事等

**単元の指導目標**

○複数の文章を読み、それらを関連づけて考える。

○「本」という一つのテーマに対して、さまざまな切り口があることを知る。さまざまな切り口からの、さまざまな人の意見を知ることにより、考えを深めていく。

○評論の特徴を知り、読解に役立てる。

○小説を深く読む方法につて考え、実践する。

**単元の評価規準**

○文章を読み、他の文章や既有知識と結びつけ、考えたことを発信しようとしている。

○他者の意見を、自分の考えの参考にしようとしている。

○評論の特徴を知り、読解に役立てている。

○小説における作者の選択を考察している。

**指導にあたって**

**単元観**

年間の目標として、「『世界の見方』のさまざまなあり方を知る」「多くの文章を読み、関連づけて考える」の二つを掲げている。これらの目標に到達するために、四年生最初の単元として「『本』という存在」を設定した。「本」を扱うことにしたのは次の理由からである。

①本を読んだことのない生徒はいない。誰もが何らかの意見を持ち、発信することができる。誰もが自分の考えを発信できるテーマを年度の最初に扱うことによって、意見交換が活発になりやすい雰囲気をつくる。

②教材の候補となる文章が多い。多くの著者の、さまざまな考えが綴られた文章を容易に探すことができる。しかも「本」という身近な存在が素材なので、その文章は平易であることが多い。

**第五次・図書館活用について**

　本校の後期課程生徒は、前期課程と小学校で基礎的な資料収集能力は既に身につけている。そして、校内のみならず書店や公立図書館で実践し、その力に磨きをかけている。また、高校の学習内容ともなると、本校の図書館の規模では「さまざまなキーワードで検索し、書架の間を歩き回り、レファレンスを利用し、目的の資料にたどり着く」という経験をするために使うのは難しい。

そこで、今回は後期課程生徒が学校図書館内で授業をおこなう必然性を重視して、欲しい情報が載っている本を探すのではなく、本の装丁に注目して書架を巡るという活動を考えた。「装丁に注目した資料収集」ならば、生徒たちは今までよく見たことがなかった番号の書架にも目を向けることになる。図書館をよく利用する生徒でも、９類の書架しか見ていないということはよくある。書架の間をくまなく歩き回り、検索機で探すのとはちがう、偶然の出会いを楽しんでほしい。

第一次～四次で出てきた「紙の本は具体的な姿を持っており、書架を形成することができるのが大きな特徴といえる。」という話題とつなげて、「本の姿」を味わう。

**生徒の状況**

　附属大泉小出身の生徒、その他国内の小学校出身の生徒、海外の小学校出身の生徒、１年９月以降の編入生、中国からの留学生が混在している。

**単元の指導計画と評価計画（全１４時間）**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 次（時間数） | 学習内容 | 図書館活用 |
| 〈一次〉（二） | 最初の授業：オリエンテーション新聞記事「図書館貸し出し猶予を…小説家が巻末にお願い」をもとに、図書館の意義等について考え、話し合う。 | （今まで自分がどのように図書館を利用してきたか思い出す。） |
| 〈二次〉（四） | 評論『歩き続けるための読書』（池澤夏樹編『本は、これから』岩波新書）評論は、抽象化・具体化という言い換えの連続でできていることを理解する。この評論の内容に基づいて、電子書籍・電子辞書の利用状況について意見を交換しあう。（電子か紙かという二者択一の考えからは脱する。紙の厚みが好き、といった気分の問題ではなく、紙であること、データであることの本質に迫る。） | メディアセンターにある関連書籍を紹介する。 |
| 〈三次〉（四） | 小説『旅する本』（角田光代『さがしもの』新潮文庫）作者の選択が読者に与える影響について考える。この小説の内容に基づいて、『本の読み方　スロー・リーディングの実践』を読み、再読の価値について考える。 | メディアセンターにある関連書籍を紹介する。 |
| 〈四次〉（二） | 「本を所有すること」について、資料を読みながら考え、話し合う。『内田樹の研究室』『不良のための読書術』『読書力』【課題】「本」「読書」について、自由に話題を選択し、個人的な考えを綴る。具体的体験・事例と、それに基づく考察・主張を書く。600字程度。 | メディアセンターにある関連書籍を紹介する。 |
| 〈五次〉（二） | 「本の姿」について考える。【一時間目】装丁についての知識を得る。幕末・明治の本を紹介　各社新書の装丁を比較　『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『銀河鉄道の夜』の複数の装丁を比較【二時間目】司書のブックトークを聞く。前時に得た装丁の知識をふまえて、自分が注目した本を紹介する。 | 司書のブックトーク「装丁」という視点で館内の書架を巡る。 |

**本時の展開（五次：２時間中の２時間目）**

**本時の目標**

○「装丁」という観点で本を見るという経験をして、今後の読書生活をさらに豊かにする土壌を作る。

○司書・他の生徒から本の紹介を聞き、装丁について自分が考える以外の視点を得る。

**本時の評価規準**

○「装丁」という観点で本をよく見て選んでいる。

○司書・他の生徒の本の紹介をよく聞き、新たな視点を得ようとしている。

**本時の学習過程**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 時間 | 学習内容・学習活動 | 指導・支援 |
| 導入（４分）展開①（１０分）展開②（１５分）展開③（１０分）展開④（１０分）まとめ（１分） | 本時の予定を把握する。司書のブックトークを聞く。「装丁」という視点で館内の資料を見て、「心ひかれる姿の本」を一冊選ぶ。ワークシートに選んだ本の情報を記入する。自分が選んだ本をグループで紹介する。数名の生徒がクラス全体に自分の選んだ本を紹介する。本を書架に戻す。 | 本時の予定を伝える。前時に知った本の部位の名称を利用しながら紹介するよう伝える。発表方法・規準は指定しない。「心ひかれる本」を仲間に伝えるだけの活動にそういったものはそぐわないし、入学時から数々のプレゼンをこなしてきた４年生は、場面に合った方法を自分で選択するはずである。ワークシートを回収する。 |

**参考文献**

桂川潤『本は物である　装丁という仕事』新曜社　２０１０年

坂川栄治＋坂川事務所『本の顔　本をつくるときに装丁家が考えること』芸術新聞社　２０１３年

平成27年度学校図書館資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する研究

学校図書館を活用した授業実践

東京学芸大学附属国際中等教育学校

司書：渡邊有理子

**単元名「本」という存在における司書のブックトーク**

支援の種類：ブックトーク

教員からの要望：授業の冒頭10分程度、司書の目からみた面白いと思う装丁の本を紹介するブックトークをおこなってほしい。その際に前時で生徒に説明した装丁の部位名を使いながら紹介をしてほしい。

司書のブックトークのポイント

1. 古典と現代作品の両方を紹介し、9類（文学）以外の本の装丁もとりあげる
2. ブックトークの中で分類記号についてもふれる
3. 国際中等の特色を活かし、洋書の装丁についてもふれる

1．『はてしない物語』ミヒャエル・エンデ　岩波書店　1982年発行

　内容の途中で、主人公の少年が古本屋で手にした本が、読者が読んでいる『はてしない物語』という本と同じ装丁であることに気づく。装丁そのものが物語の一部になっていることを紹介する。

2．『ランチのアッコちゃん』柚木麻子　双葉社　2013年発行

　今年ドラマ化もされ、続編も発行された最近の作品。ランチがテーマであることを強く主張するお弁当の表紙からはじまり、花布、扉、見返し部分がすべてお弁当の具材を彷彿させるカラーに統一されていることを紹介。

3．『13歳からのテロ問題』加藤朗　かもがわ出版　2011年発行

　１と2で紹介した本はいずれも9類（文学）の本だったが、3類（社会系）の本の装丁を紹介。表紙に砂でつくったランダムな長方形が、アメリカ同時多発テロ事件で標的とされた世界貿易センタービルを表現していると思われる。扉、見返しの色が灰色であることと、灰に覆われたニューヨークの町とを重ねて想像される。

4．『カッシアの物語』アリー・コンディ　プレジデント社　2011年・『MATCHED』Ally Condie

原書は昨年度の国際中等において洋書の貸出図書第1位の作品だが、和書は貸出ランク100位にもはいっていない。同じ作品でも、装丁がもたらす印象でいかに貸出にも影響するのかを紹介。

5.『TINKER, TAILOR, SOLDIER, SPY』John Le Carre

　洋書には、題名よりも作者の名前のほうが大きい表紙デザインの作品はけして珍しくない。和書の場

は多くの本が題名のほうが著者名よりも大きい。館内の9類では題名と作者名が同じ大きさの本が2

冊あっただけであった。日本と外国の装丁への価値観の違いや、販売戦略の違いを紹介。